

愛媛大教育 田辺 勝利

目的 石器時代から現代に至るまでの染料の歴史を体系的に把握するために「年表染料の歴史」を作成した。天然染料から合成染料への変遷過程の内容を多面的観点から綿密に調べた。

方法 種々の文献・メディアから主として染料、顔料、染色に関する情報を収集し、年表形式で整理した。石器時代は顔料を中心としてまとめた。それ以降から合成染料が登場するまでは、天然染料と顔料を中心にまとめ、天然染料の欄は新大陸、ヨーロッパ、西アジア、東アジアの地域別に分け、特に藍と茜の枠を設定した。合成染料が登場する時代以降は、天然染料、合成染料、染料の応用、顔料の欄を設定した。染・顔料の数はすこぶる多いので、歴史、実用、学問上重要なものに限定した。

結果 1. 染料、顔料は直接的に人間の視覚を刺激するので、人は古くからそれらに深い関心を持ってきた。 2. 出土した粘土板やパピルスに染色技術の記述がみられる。 3. 色の变化こそ物質変化（化学変化）の本質である、と解釈されていた。 4. もっとも古く人工的に合成されたものは、「エジプトの青」といわれる顔料であった。 5. 繊維に染められた最古の染料でその種類が分析によって明らかなのは、エジプトの亜麻に染められた藍、茜、紅花、インドの綿に染められた茜である。スイス湖上遺跡の亜麻布にウエルドがみられる。 6. 歴史的にも、現代においても、天然、合成染料は医薬、薬学と深い関わりがある。 7. 硫酸の本格的大量使用は、織物の漂白と共に、藍を羊毛に染めることから始まった。